

陳舜臣さんを語る会通信

NO.33 Mar. 2021

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2021年3月20日

【絶筆】『天空の詩人 李白』

『群像』2008年1月号から連載が始まり、第7回まで掲載されたところで陳舜臣さんが脳内出血で倒れ休載となり、そのまま再開できず、著者直筆の原稿ということでは絶筆となりました。

江戸川乱歩賞を受賞した『枯草の根』でデビューし、推理小説や中国歴史小説の書き手として知られた陳舜臣さんが、晩年、強い関心を持っていたのは詩人・李白でした。李白は誰もが名前を知っている

詩人でありながら謎が多く、著者が興味を持ったのも「わからない人物だったから」とおっしゃっています。李白の漢詩を一篇ずつ繙きながら、謎の詩人・李白に迫る評論エッセーです。2017年、講談社発行。表紙→

(編集委員 橘雄三)



陳舜臣さんの文章で

李白の出自を探ります

文中、傍線は編集委員加筆

まず、『Who is 陳舜臣』「天空の詩人、李白」から引用します。

正史である『新唐書』の李白の伝には、

——李白、字は太白、興聖皇帝

九世の孫なり。其の先(祖)、隋末、罪を以て西域に徙され、神童の初、遁れ還りて巴西に客たり。

とある。興聖皇帝とは五胡十六国時代、甘肅省西部に涼と名のる小政権がいくつも生まれ、その一つの西涼のあるじ李暠(りこう)のことである。(中略)もちろんこの系譜は疑わしい。

李白は罪があつて西域に流された者の子孫であるという。神童は七〇五年正月からはじまって、僅か二年九ヶ月しか用いられなかった元号であるから、李白はすくなくとも五歳のとき、巴西(四川省)に帰れたのである。(308頁)

いまここでは、系譜についてはこれ以上ふれません。

右の「隋末、罪を以て西域に徙され、神童の初め、遁れ還りて巴

西に客たり」ですが、どのような「罪」なのか具体的ことはわからず、また、「罪に非ずして」としている文献もあつて、李白の家族が西域に行つた事情はよくわかりません。

当時、流刑で、あるいは戦乱を逃れて、あるいはまた、北方民族に拉致されて、塞外に移り住む者が多かつたようです。

次は『天空の詩人 李白』を引用しながらみていきます。

塞外に出た漢族の数が多いことは当時の記録にもある。李白の家がどういふ事情で西域にいたのかはわからない。わかっているのは、当時おびただしい漢族が西域に住していたことである。

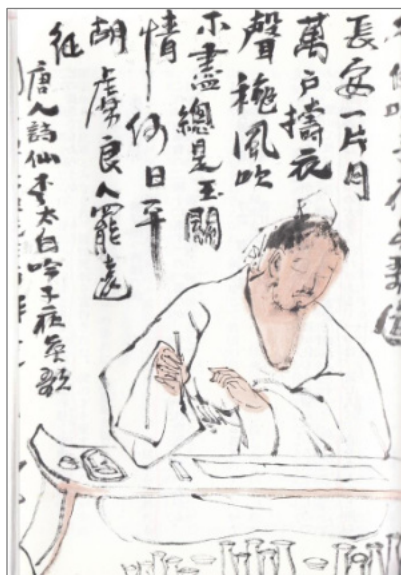
多くの漢人がいたとなれば、多くのビジネスも彼らのあいだから生まれだであらう。李白はおそらく、そんな冒険的実業家の家に生まれたのであらう。

そして李白の家はかなりの大家族であつたようだ。(中略)

大家族を連れて西域か

ら帰つたのだから、李白の父は裕福な人であつたにちがいない。すくなくとも難民のように、のがれて帰つたのではないだろう。(59頁)

李白は七〇一年に西域に生まれ、七〇五年に四川に移つたのである。李白の母の素性もまったくわからない。李白は漢人と胡人との混血児ではないかという説もあつた。あるいは李白その人も胡人ではないか、と考える人もいたのである。李白胡人説では陳寅恪(一八九〇—一九六九)の説が最も有名であり、それにたいして、郭沫若(一八九二—一九七八)が反論したことは有名である。私はこれを勝負のつかない論争だともっている。(12頁)



講談社文庫版『中国詩人伝』「李白」より

挿画・李庚

李白 略年譜

西暦年	事 項
701	西域に移住した漢民族の家に生まれる
705	西域から戻り、四川の西部に移り住む。父は裕福な人であったようである
725~ 最初の結婚は 727 或は 732	この頃、四川を離れ長江を下り、今の湖北・湖南・江蘇・浙江の各地を歴遊、数年で三十余万金を散財したと伝えられている その後も、洛陽、太原、山東を歴遊 李白は、その伝を見ると、最初、安陸で許家の娘をめとり、一女一男を得、その後、劉という女と暮らし、劉と別れた後、魯（山東省）の一婦人と暮らし、最後に宗家の娘をめとったとある 李白が安陸で結婚したのは、開元十五年(七二七)説と開元二十年(七三二)説とがある。天宝元年(七四二)、四十二歳で長安に行くまでのあいだが、李白の最も安定した時期ではないかと思う。「静夜思」は、この時期に作られたと思われる(p.80) 735年、李白は洛陽をへて太原(山西省)に遊んだ。たまたま、郭子儀(かく・しぎ 後年、唐朝中興の名将となる)が、一兵卒として隊伍の間にあり、過失を犯して厳罰に付せられようとしているのを見て、部将にとりなし、その罪を免れさせた。このことを恩義としていた郭子儀は、李白が皇弟李璣の幕僚として大逆罪に問われたとき、おのれの官爵を以て李白の罪をあがないたいと申し出た この時期、孟浩然と交遊。「黄鶴楼送孟浩然之広陵」
742~ 744	李白は天宝元年(七四二)、長安に赴いて、玄宗皇帝に謁見を許され、翰林供奉に任ぜられた。翰林院は皇帝に直属している。思いついたときに呼び出すので、毎日出勤しなくてもよい。李白が酔っ払って寵臣の高力士に鞋をぬがせ、そのために二年ほどで追放されたことになっている。李白はなにも勤務中に酒を飲んだのではなく、酔っ払っているときに呼び出されたのである(p.20) 足かけ三年、正味一年有余のあいだに、李白が作った「清平調詞」と「宮中行樂詞」は、彼の宮廷詩人としての実績である(p.98) 「子夜呉歌」第三首(長安一片月 …)、 「少年行」(五陵年少金市東 …)はこの時期の作と思われる
744~	長安を追放されてからの約十年間、兗州(えんしゅう 山東省)と梁園(河南省)を中心に四方遊歴の生活を続けた。杜甫と出会い意気投合、河南各地を旅したのもこの時期
753	阿倍仲麻呂の遭難死の報(誤報)に接し、「哭晁卿衡」を詠む
755	天宝十四載(七五五)十一月、安祿山は叛旗をひるがえす。その直前に、李白は秋浦という所で、「秋浦歌十七首」を作った。秋浦は現在の安徽省池州市にあるが、唐代は池州と呼ばれていた。白髪三千丈の詩は其十五である(p.20) 11月、安史の乱勃発(-763)
759	李白に政治的な野心はなかったが、長江に遊んだとき、皇弟李璣の幕僚となった。安祿山の乱がはじまったので彼も勤皇軍に参加しようとしたのだ。しかし、李璣は兄の肅宗と仲が悪く、その命令をきかなかったため、賊軍として討伐を受け、幕僚だった李白も死刑を宣告される。死一等を減じられて夜郎(貴州)に流されることになったが、それも赦免された。「早発白帝城」は、そのときの喜びをうたったもので、やはり大空を飛ぶようなリズムがある(p.311)
762	赦免後、長江下流域の宣州(現在の安徽省南部)を拠点に各地を放浪し、この年の冬、宣州当塗県の県令李陽冰の邸で病死



事項欄、陳舜臣さんの文章は字体を変えました。典拠は、759年の事項のみ『Who is 陳舜臣』
「大空の詩人、李白」で、それ以外は『天空の詩人 李白』です

『天空の詩人 李白』掲載詩一覧

陳舜臣さんは、「李白は約千首の詩をのこしている。もっと多く作っただろうが、いま私たちにのこされたのはそのていどである」(p.33)と、おっしゃっています。そしてその中から44首が『天空の詩人 李白』で言及されました。

「天空の詩人」の面目躍如たる「早発白帝城」が入っていないのは、2度目の脳内出血で叶わなかったのでしょうか。李白以外の詩人では、李賀の詩が一首と杜甫の詩が2首、入っています。

番号	掲載頁	題	第一句又は関連句
1	13	子夜呉歌 其三	長安一片月
2	16	子夜呉歌 其四	明朝驛使發
3	17	子夜呉歌 其一	秦地羅敷女
4	18	子夜呉歌 其二	鏡湖三百里
5	20	秋浦歌 其十五	白髮三千丈
6	21	秋浦歌 其一	秋浦長似秋
7	22	秋浦歌 其二	秋浦猿夜愁
8	24	秋浦歌 其三	秋浦錦駝鳥
9	25	秋浦歌 其十一	邏人橫鳥道
10	27	秋浦歌 其十二	水如一疋練
11	29	蘇臺覽古	舊苑荒臺楊柳新
12	30	越中覽古	越王勾踐破吳歸
13	31	九日龍山飲	九日龍山飲
14	33	九月十日卽事	昨日登高罷
15	34	塞下曲 其一	五月天山雪
16	36	春夜洛城聞笛	誰家玉笛暗飛聲
17	37	塞下曲 其二	天兵下北荒
18	39	塞下曲 其三	駿馬似風飆
19	40	塞下曲 其四	白馬黃金塞
20	42	獨不見	白馬誰家子
21	43	塞下曲 其五	塞虜乘秋下
22	45	塞下曲 其六	烽火動沙漠
	47	李賀 「夢天」	黃塵清水三山下
23	49	塞上曲 一	大漠無中策
24	51	塞上曲 二	命將征西極
25	52	塞上曲 三	轉戰渡黃河
26	54	訪戴天山道士不遇	犬吠水聲中
27	55	登錦城散花樓	日照錦城頭
28	57	峨眉山人月歌	峨眉山月半輪秋
29	62	少年行	五陵年少金市東
30	63	前有樽酒行 其二	琴奏龍門之綠桐
31	68	採蓮曲	若耶溪傍採蓮女
32	72	贈孟浩然	吾愛孟夫子
33	74	黃鶴樓送孟浩然之廣陵	故人西辭黃鶴樓
34	78	聞王昌齡左遷龍標遙有此寄	楊花落盡子規啼
35	81	靜夜思	牀前看月光
	82	杜甫 「飲中八仙歌」	李白一斗詩百篇
36	84	清平調詞 其一	雲想衣裳花想容
37	85	清平調詞 其二	一枝紅艷露凝香
38	87	清平調詞 其三	名花傾國兩相歡
39	90	宮中行樂詞 其一	小小生金屋
40	92	宮中行樂詞 其二	柳色黃金嫩
	94	杜甫 「哀江頭」	昭陽殿裏第一人
41	94	宮中行樂詞 其三	盧橘為秦樹
42	95	宮中行樂詞 其四	玉樹春歸日
43	97	宮中行樂詞 其五	繡戶香風暖
44	98	宮中行樂詞 其六	今日明光裏

李白は、なぜ「天空の詩人」なのか？

左の一覧表、番号1、「子夜呉歌 其三」の第二句、「萬戸…」について、『天空の詩人 李白』（14・15頁）から引用します。

万戸、という表現は、平面では実感としてあらわれない。夜だからあかりをつけているだろうが、万戸のあかりは、高みに登らなければよく見えない。高所から見下ろすのが、李白の視線なのだ。『陳舜臣読本 No.15 陳舜臣』で私は李白のことをかいた小文に、「天空の詩人」というタイトルをつけた。これは李白が天空にかけ登って、そこから森羅万象をみつめているというイメージに由来する。



「父との思い出」王 由果

陳舜臣中国ライブラリー30 月報30 (2001年10月 集英社)

父は私をとてても可愛がってくれました。「目の中に入れても痛くはない……」という表現は、まさに父が私に対する愛情表現そのものだと思います！(言い切ってしまった)

子供の頃、私には個室がありませんでした。私は父の書斎にベッドを置いてもらい、父の万年筆が原稿用紙をすべる音を守唄にしています。その音が時どき止まったり、原稿用紙を丸めてグシャグシャしているのを聞くと、とても不安になりました。そんな時、父は色んな話をしてくれたり、歌を歌ってくれました。眠れないといつまでもいつまでも横にいてくれました。

私は思春期になっても父を疎ましく思うこともなく、父の取材旅行にも何度も同行したし、父と街に出かける時はいつも手を繋いでいたし、完璧なファザコンだった！今にして思うと、気持ち悪い……でもその時は当たり前だと思っていた……もちろん父に叱られた記憶は無い！(まあそのぶん母には思い切り叱られました……)

私の結婚の機会に、やっとお互い親離れ子離れができたと思います。

私の子育てが一段落した頃、父は脳内出血で倒れました。しばらく意識が朦朧とし、身内の名前すらわからない時、病院に行った私を見た父はわくわくと抱きしめてくれました。あの時父の目に私は、ベッドで眠れなくて、不安がっていた子供の頃の私に戻っていたのだと思います！

いつもは物静かな父でしたが、入院中、また小説が書きたい、筆を持ちたいという意欲は人一倍でした。はじめは左手で、次は動かない右

手を左手で持って、必死に字を書こうとする姿はすさまじいものがありました。入院期間の六ヶ月、本当にリハビリとの戦いでした。しかし辛いいりハビリを越えれば、また小説が書けるといいう強い思いが父にはあったと思います。

倒れた当時、薬にもすがらないで、私は良く当たるといふ占い師の方に父の今後を占ってもらいました。その時は「もう小説を書くのは無理でしょう」と言われました。それからしばらくして、病室で最初は左手で、後に右手で連載小説を鉛筆でコツコツ原稿用紙に書き始めるようになりました。

父の意志の強さと、小説への情熱を感じさせられる貴重な日々でした。人間の運命は自分で切り開くものなんだなあと痛感しました！

あれから八年、最近の父の日課は、午前中ゆっくり仕事をし、午後プールでリハビリをし、休憩して夕方からまたゆっくり仕事をします。病後は万年筆から鉛筆、そしてボールペンに変わったからか、原稿用紙をすべるペンの音も、昔のガシャガシャという音から、スースーという穏やかな音になってきました。年齢や病気のせいもあるのでしょうか、余裕ができたのか、大らかな気持ちで仕事に取り組んでいるようです。

ついでに母のことも少し。小さい時の父の記憶が万年筆ならば、母は赤鉛筆です。母は父が書いた原稿に時どき目を通し、変な文章や誤字など細かく訂正することがありました。時には読者として厳しく作品を批評する時もありました。しかし、年月が経つにつれ、訂正する事もなくなり、母は完全に職を無くしました。でも

父の作品の最大のファンであり、最大の理解者の地位は「永久に不滅です」。(なぐんて、どっかできいたことがあるフリーズですね！) 二人三脚・夫唱婦随、そんな言葉がすべて父と母に当てはまるように思います。



陳舜臣さんと由果ちゃん
イラストは編集委員作成

私はなにも親孝行らしい事はしていないのですが、数年前、長年住み慣れた六甲山の麓の一軒家から駅に近いマンションへの転居を薦めたのが唯一の親孝行かな？

今は近所の方とも仲良くなり、鍵一つで出かけられ、簡単に旅行に行けるマンション生活を謳歌しています。今年もハワイ、ロスアンジェルス、キューバと羽ばたいています。ただ一つ、一軒家に比べると狭いので、父と母が顔を突き合わせている時間が増えたのか、夫婦喧嘩の回数が増えたのが気になるのですが……それも父が元気になったからだと思います。